アクセス！

カイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクセス！

【Ｎコード】

Ｎ４９６３Ｌ

【作者名】

カイザー

【あらすじ】

超完璧人間、七宮黒乃（ななみや・くろの）が巻き起こすドタバタ！？オリジナル学園ファンタジー！

主人公設定資料（前書き）

自分でも何したいんだ？この小説はとゆう感じの学園ファンタジーで、誤字・脱字も沢山出てくると思いますが、暖かい目で見守って下さい。

主人公設定資料

七宮　黒乃　（ななみや・くろの）

全てにおいて完璧で出来ない事が無いくらいの完璧人間の自称普通の高校一年生

家族は、母親と父親は黒乃が３才の時に他界。

アメリカのハーバード大学に通ってる姉が一人なので家にはいつも１人だけで過ごしてる。

容姿は上の中で黒髪の肩にかかる位の長さ

性格はかなりのドＳ

しかし、黒乃自身はあまりに完璧過ぎて今の生活に飽きている。

因みに黒乃の姉も黒乃ほど完璧人間ではありませんが、黒乃のよりドＳです。

主人公設定資料（後書き）

いきなりですが、すいません！

まだ話の整理がつかないので今回は主人公設定だけにしました。

なるべく、早めに更新したいと思っています。

それでは、さようなら。

第一話：変わらない日常（前書き）

やっと一話書けました。バトルまでいけるかな？と思いましたが、全然無理でした。おそらく、はぁ？なんだこの小説？と思うかもしれませんが、それでもいい人はどうぞ見てください。

第一話：変わらない日常

此処は、私立第五桜花学園毎年、優秀な生徒が入学してくる有名な高校だ。

そして、俺はこの桜花に通ってる一年の七宮黒乃(ななみや・くろの)、至って普通の高校せ·i「死ねぇ！七宮ぁぁぁぁぁ！」

黒「消えろ、ゴミ」

ドゴッ！

「ガハッ！」

黒「ふ――――――、全く懲りない奴等だ」

もう一度言いうぞ、俺は七宮黒乃、至って普通の高校生だ

だが、周りの連中はそうは思って無いらしい、周りでは、俺の事を超完璧人間と言ってるらしいが、まぁ無理もないか、なんせ俺は今までどんな事も完璧にこなしていて、苦手な事がないからな。

黒「おはよう。」

拓「おー！黒乃おはよう！今日もムカつくほどかっこいい顔してんなぁ」

今、話し掛けてきてる奴は同じクラスの時雨拓人(しぐれ・たくと)って奴だ名前と喋り方からわかるように、こいつは馬鹿だ

拓「おいっ、お前今絶対失礼な事考えてだろ！？」

黒「いや、ただやっぱりお前の顔はいつ見てもブルドッグ以下だなと思っていただけだ。」

拓「全くもって失礼だろうが！」

幸「あんた達、朝から五月蝿いわ、少し黙れないの？拓人？」

黒「幸音・・」

拓「あれ？黙らなきゃいけないの俺だけ？」

彼女の名前は藤堂幸音（とうどう・ゆきね）藤堂財閥のお嬢様だ

幸「てゆうか、黒乃・・・・あんた、また不良と殺り合って来たの？」

黒「ふんっ、向こうからいきなり襲い掛かって来たから返り討ちにしただけだ」

幸「はぁ～～～～全く」

拓「けど、まだつまらないんだろ？黒乃」

黒「あぁ、この程度じゃ物足りないんだ、あ～ぁもっと刺激のある毎日が欲しいなぁ。」

幸「何馬鹿な事言ってんのそんな事言ってる暇あったら次の授業の

準備したら？」

拓「あーい」

黒「・・・・・・・・・・・・・・・」

第一話：変わらない日常（後書き）

カイザー「やっと一話目書けたぜ！」

黒「これからやっと始まっていくんだな、俺の物語が」

カイザー「えぇ！これからドンドン行きますよー！」

黒「ここで、お知らせだ、もし誤字・脱字があれば教えてくれ。」

カイザー「感想を書く場合管理人が傷つく様な事や荒らしは絶対にしないで下さい。」

黒「しかし、管理人がまだ未熟なため改善点や注意点などを考えてくれると有難いです。」

カイザー「以上、お知らせでした、ではまた今度お会いしましょう！」

第二話：変わっていった日常（前書き）

もう本当にグダグダです、文才がない自分がにくいです。

第二話：変わっていった日常

黒「全く・・・なんで俺がこんな事を・・・・」

黒乃は今、真夜中の１１時だとゆうのに学校の中にいる。そしてその訳は数時間前にさかのぼる。

はいっ、回想シーン

黒「はぁ？俺が貸したノートを学校に忘れただぁ？」

拓「うん、そうだからさ変わりに学校に取りに行ってくれない？」

黒「はぁ――――、拓人」

拓「はっはいっ！な、ななななんですか？」

黒「取りに行ってやるが、一つ忠告があってな」

拓「なっ、なんでしょうか？」

黒「月のない帰り道には気を付けろよ」

拓「はっはいっ！（めちゃめちゃ怒ってる～どーしよう～！）」

と、ゆうやり取りがあったらしい、そして黒乃は今学校に来てる訳だ

黒「これか、全く拓人の奴明日絶対に、殺してやる」

拓（あっあれ？今一瞬寒気が・・・・まっまさかな）

黒「さて、ノートも見つかったしそろそろ・・・・・・？あそこはパソコン室？なんでこんな時間に明かりが」

真夜中の１１時なのにパソコン室に電気がついてる事に気づいた黒乃は、すぐにパソコン室へと向かった

黒「明かりは、ついてるが人の気配がしない、誰もいないのか？」

黒乃は、思い切って扉を開けた、するとそこには電源のついたパソコンがあるだけだった。

黒「くそっ、只の消し忘れかよ全く。」

呆れた様子のままパソコンの電源を切ろうとしたら突然画面が光りだした

黒「くそっ、なっなんだ！？」

余りの眩しさに目を閉じてると急に

？「きゃあ！？」

黒「なっ！？」

女の子がいきなり激突して来たのだ。

？「いてててててててて」

黒「おいっ、いつまで乗ってるつもりだ？」

？「へ？・・・・・・きゃあ！？だっ誰ですか！？あなたっ！？」

黒「それは、こっちの台詞なんだが？」

？「あっ！もしかして貴方が私のマスｔ「とりあえず、どこの小学生だ？」・・・は？」

黒「なんだ？小学生じゃないのか？」

？「失礼なっ！私はこれでも１４歳よ！」

黒「じゃ、次は名前と住所だな」

？「名前は、姫羅々（きらら）で住所はパソコン」

黒「・・・・・・はぁ――――――」

姫「なっ何ですか？」

黒「ちょっと精神科に行こうか？」

姫「人を可哀想な子を見る目で見るなー！」

黒「だって、住所がパソコンって今どき売れない芸人だって言わねぇぞ」

姫「マスターは、私の事が信じてくれないんですか？」

黒「・・・・・そう言えば、さっきから言ってるマスターってどうゆう事だ？」

姫「何言ってるんですか？マスターはパートナーである私を使って、ウイルスや他のペアを倒さないといけないんですよ？」

黒「ウイルス？ペア？まて、まていったい何を言ってるんだお前は？」

姫「う～ん、じゃあ実際にパソコンの中に行きましょうか？」

黒「は？」

強引に黒乃の手を引っ張る姫羅々

姫「行きますよ～データ・コード認証！・・アクセス！」

黒「これは！」

姫羅々が持っていた、腕輪の様な物が光って二人はパソコンの中に入って行った

黒「ちっ！いったい何がどうなってやがる～！」

そのまま、下に落ちていく黒乃と姫羅々

姫「ふう～、さぁマスター到着しましたよ！」

黒「此処は・・・・」

そこには、水色の空間が広がっていて、複雑な形をしたラインが地面に張り巡らされていた。

姫「此処はプログラムの世界、名をアイリスと言います。」

黒「アイリス・・・」

余りの事態に唖然としている黒乃

姫「では、マスター私と契約を・・・」

黒「契約ってどうやｒ「ん～～」ん！」

いきなり、黒乃にキスしてきた姫羅々

姫「プハッこれで契約は、完了です。さぁマスター、一緒にアイリスを統べる神になりましょ・・・・あれ？マスター？」

ガシッ！と姫羅々の頭を掴む黒乃

黒「何、ナチュラルにキスしてんだ？」

姫「痛い、痛いです！マスター！」

黒「しかも、他のペアって俺以外誰もいねぇじゃねぇか！」

姫「あっ！だってそれは、ペアが元々少ないんですよ今、ペアがいる場所は、此処の付近ですよ。」

黒「此処の付近って事は・・第一から第六までの学園全てにペアがいるって事になるのか。」

姫「マスター！前の方からペアの反応が！」

黒「！」

確かに、姫羅々が言った通り前から黒乃と同じ制服の女子が現れた

黒「お前は確か風紀委員の」

？「あら？私の事知ってるの？七宮黒乃君」

黒「そう言う貴様も俺の事知ってるのか？北大路雪鳴（きたおうじ・せつな）」

雪「えぇ、学園内でも有名よ、超完璧人間ってね、しかも不良共を何人も病院送りにしているせいで、風紀委員会のブラックリストにまで載ってるわ。」

黒「で、お前は俺をどうするつもりだ？」

雪「一般人なら見逃すけど、どうやら、そうでもないみたいね。」

黒「あぁ、ついさっきマスターとやらになった」

雪「そう、なら仕方ないわね、冠夷(かむい)！」

冠「御意に」

雪鳴のパートナーであろう冠夷が人型から日本刀へと変わった

雪「ハッ！」

雪鳴は冠夷を思い切り振ってきたが、黒乃はあっさり避けてしまう

雪（早い！？何故？まだ向こうは武器を持ってないのに）

黒「ふむ、どうやら認めざるおえない様だな。」

雪「どうゆう事？」

黒「此処が非日常な世界だとゆう事だ！」

姫「おぉ！マスターが遂に動いた！？」

黒「姫羅々！大体の事は頭に入った！力を貸せ！」

姫「了解です！マスター！」

姫羅々も人型から漆黒の剣に変わった

黒「いくぞ・・・・」

それだけ言うと黒乃はその場から消えた

雪「！消えた！？いっ一体どこに？」

辺りをキョロキョロと探す雪鳴・・・だが、次の瞬間

黒「上だ」

雪「！」

黒乃は、雪鳴の上から物凄い勢いで剣を振るった。雪鳴はその攻撃をギリギリの所で受け止めた

雪「くっ！（なんて重さ、まずいこのままじゃ確実に負ける！）ハッ！」

雪鳴は力を振り絞って黒乃を押し返した。

雪「はぁ、はぁ、はぁどうやら時間切れの様ね。」

黒「何？」

雪「外、もう朝よ。」

黒「・・・なるほど、確かにならこの続きはまた今度だな」

しかし、そこにはもう雪鳴は、いなかった

黒「ふっ、帰るぞ姫羅々」

姫「はぁ～い」

冠「強かったなあの二人」

雪「えぇ、けど！次は必ず勝ってやる！」

黒「ふーーー全く、今日は色んな事があって大変な目にあった」

姫「良いじゃないですか、闘ってる時のマスター格好良かったですよ。」

黒「ふん、当たり前だ、俺は全てにおいて完璧だからな。」

姫「けど、これから忙しくなって行きますよ？マスター」

黒「はっ！上等だ、誰が相手だろうが完全に服従させてやる！」

姫「じゃあ、よろしくですマスター」

黒「あぁ」

こうして、黒乃の望んでいた、非日常な生活が始まった。

第二話：変わっていった日常（後書き）

カイザー「はぁ～」

姫「どうしたんですか？」

カイザー「おぉ、姫羅々聞いてくれ、俺は自分の文才のなさを悔やんでるんだ」

姫「ありゃ～残念ですがそればっかりはどうしようもありませんし、私に言われても困ります。」

カイザー「（ノД＞。）」

姫「カイザーが無言でしかも泣きながら逃亡したため、あとは私がやります。」

姫「今回から、バトルシーンが出てきました！え？ちょっとしかなかったって？それは、私のせいではないので、私を責めないでください。」

姫「ですが！今回バトルがあったように次回からバトルシーンが沢山入ってきます！（多分）」

姫「では、また～」

第三話：生徒会強奪作戦！（前書き）

更新、遅れてすいません！

第三話：生徒会強奪作戦！

拓「なぁ、なぁ黒乃知ってるか！？今日このクラスに転校生が来るらしいぜ！しかも、女子だってよ！うおー、時雨拓人１６歳！ついに春の季節がやって参りました！」

黒「黙れ、ゴミ虫貴様に春など、永久に訪れはしないずっと土の中で冬眠してればいいんだ。」

拓「あれぇ？もしかして黒乃君、嫉妬～？なんだ意外とかｗ「今すぐ消してやろうか？」ごめんなさい」

黒乃は、どっから出したかは、わからないが黒い木刀を拓人の額に当てていた

黒「全く、転校生ぐらいで騒いで馬鹿だろ。」

幸「黒乃は、興味・・・あるわけないか。」

黒「あぁ（だって誰来るか知ってるからな）」

何故黒乃が知ってるか、それは、数時間前に遡る・・・・・・・

黒「何？学校に行きたいだと？」

姫「はいっ！昨日わかったじゃないですか、学校に敵がいるって」

黒「しかし・・・・」

姫「安心して下さい、マスター、上手くやりますから、ね」

黒（とか言ってたが、一体どうするつもりだ？親族か婚約者か・・・それとも）

先「おらっ席に着けー・・・・・よし、まぁみんな知ってるかもしれんが、転校生を紹介する。ほら入って来なさい」

姫「はいっ！」

男子共「オォ－－－－－－－－－－－！！！／／／／／／／／」

姫「初めまして、七宮姫羅々と言います。あそこにいる黒乃君の・・・」

黒（さぁ、どうくる！？）

姫「雌奴隷です」

ピシッ！！！！！教室の温度が、かなり下がった

黒（くそっ！そう来たか）

拓「黒乃・・・・」

黒「んぁ？ってお前等どうしたんだ？」

何故か、男子全員が武器を手にして殺気を飛ばしてくる

拓「いくぞー！野郎共！あの鬼畜野郎に神の裁きを与えるんだ！」

男子共「オォ――――――――――――――――！！！！！！！！」

黒「ほぉ、拓人の命令で男子が一致団結か、全く普段からその力を俺の・・・コホン・・・世界の為に使ってくれればいいんだが」

今、絶対俺の為にって言おうとした

拓「死ねぇ！黒乃！！！」

しかし、拓人が放った木刀は黒乃が持っていた木刀で弾かれてしまった

黒「ハッ！」

拓「ぶへっら！」

綺麗に天上にぶつかった拓人

黒「おい、拓人、お前何時から主人である俺に逆らえるようになったんだ？全く仕付けがなってないな！この犬は！」

拓「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

しばらくお待ちください

黒「おい、立てよ犬・・・まさかこれで終わりじゃねぇよな？」

拓「――――――――――――――――――――」

ゴミ袋に詰められた状態になった、拓人

幸「ちょっと、黒乃ゴミの分別ちゃんとしてよね、拓人は燃えるゴミじゃなくて粗大ゴミでしょ」

黒「あぁ、済まない、そう言えばそうだったな」

拓「人を・・・・・・勝手に・・・・・ゴミ扱い・・す・・る・な」

バタンッ！

幸「あら？本当に倒れちゃったみたい、どうするつもり？黒乃」

黒「放っておけ、どうせ、すぐに目を覚ます、で、お前等もこうなりたいか？」

男子共「いえっ！め、めっそうもございません！」

黒「そうか、ならいい」

キーンコーンカーンコーン

黒乃が馬鹿共の制裁を終えると同時に朝のＨＲが終わった

黒「姫羅々、置いて行くぞ？」

姫「へ？あっ、待ってくださいよ～マスター！」

幸「・・・・・・・」

姫「マスター、どこに行くつもりですか？」

黒「これからこの闘いを勝ち抜く為の策を考える」

姫「策って、何するんですか？」

黒「まず、生徒会を俺の物にする」

姫「生徒会を？何故ですか？」

黒「生徒会長になれば、他校の全生徒の情報が全てわかるシステムになっている」

姫「あっ！じゃあ、それで誰が選ばれた戦士か調べるんですね！流石です！マスター」

コン、コン

黒「一年の七宮黒乃ですが、生徒会長に用があるんですが」

？「どうぞ」

黒「失礼します」

生徒会室に入ると、そこに居たのは、黒乃より少し長い黒髪の青年だった

黒「貴方が生徒会長の相沢悠莉（あいざわ・ゆうり）ですか？」

悠「あぁ、そうだ、俺が生徒会長の相沢だ、何か用か？後、敬語は、よしてくれ性に合わない」

黒「そうか、恐らくだが、もう情報は、もらったのか雪鳴から？」

悠「！・・・・成る程、全部お見通しって訳か・・」

黒「あぁ」

姫「え？・・・・へ？」

どうやら、姫羅々は、話についていってないようだ

悠「そうか、だったら・・・芹空（せりあ）！」

芹「かしこまりました」

悠「先に行ってるぜ？・・・データ・コード認証・・・アクセス！」

悠莉と芹空は、アイリスに行ってしまった

姫「え～！？生徒会長って選ばれた戦士だったんですか？」

黒「今、気付いたのか？ほら、ぼさっとしてないで俺達も行くぞ」

姫「あっ、はいっ」

黒「データ・コード認証・・・アクセス！」

悠「来たか・・・」

黒乃達が、到着すると先に行っていた悠莉と芹空が戦闘状態になっていた

悠「早く構えたらどうなんだ？七宮」

黒「言われなくても、わかっている」

黒乃も戦闘状態になった

悠「行くぞ・・・・ハァァァァァァァァ！」

正面から、突っこんで来た悠莉に対して黒乃は、飛び跳ねて、上から、斬ろうとした

黒「単純だな、そんな攻撃、馬鹿でも避けられるぞ」

悠「確かに、この程度ならな、けどこれはどうだ？、天霊斬！」

悠莉から白い光が、出てその光が剣に集まって、背中にも羽が生えた

黒「光の翼？」

悠「これは、芹空の能力、芹空の能力は、光を吸収して、具現化する能力だ」

黒「成る程」

悠「行くぞ！」

悠莉は、そのまま真下に居る、黒乃めがけて剣を振り落として来た

黒「ふっ」

悠「ハァァァァァ！」

ドガンッ！！！物凄い、威力で地面にヒビが入ったが、そこに黒乃の姿は、なかった

悠（いない！？一体どこに？）

黒「残念だったな？」

悠「っ！後ろかっ！・・・・くっ！？剣が抜けない！？」

天霊斬を放った所を見てみると、剣が上手く抜けない様に沈められていた

黒「さっきのお前の攻撃を、０．２秒でかわし、０．８秒で剣の軌道をずらして地面に埋め込んだ」

悠「ば、馬鹿な！そんな短時間で、そこまで計算出来るわけが・・・・」

黒「出来るよ、なんせ、俺は、この学園でＮｏ．１の強さを持ってるからな」

芹「悠莉様・・・・」

悠「わかっている、七宮・・・この勝負お前の勝ちだ、現実(リアル)に戻ろうか・・」

ひとまず、戻って来た一行

悠「七宮、今からこの生徒会は、お前の物だ好きに使え、じゃあな」

悠莉が生徒会室から出ようとした、その時

黒「待て」

悠「なんだ？」

黒「お前等には、副会長をやってもらう」

悠「な、なんでそうなるっ！？」

黒「おもしろそうだから」

悠「嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

黒「あっ！因みに、会長命令で拒否権ないから」

悠「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

黒「これで、城は、手に入った後は、残りのメンバーか・・」

第三話：生徒会強奪作戦！（後書き）

カイザー「やっと書き終わった」

悠「何を、これくらいで疲れている」

カイザー「だって、書くの大変なんだもん」

悠「だから、貴様は、いつまで経っても――――――――――――――――――――」

カイザー「お前だって――――――――――――――――――――――――――」

芹「此処まで、読んで下さった皆様ありがとうございます、もし誤字・脱字がありましたら、感想に書いて下さい、では、また」

第四話：目覚める氷帝（前書き）

時間かかり過ぎてしまいました、すいません

第四話：目覚める氷帝

ざわざわ・・・・ざわ・・・・・・ざわざわざわ

拓「およ？何事か？この人だかりは」

幸「あっ、拓人おはよう」

拓「おっす、なぁ幸音この人だかりはなんなんだ？」

幸「実は、黒乃が生徒会長の相沢悠莉を押し退けて、生徒会会長になったらしいのよ」

拓「へぇ～」

幸「あら？驚かないの？」

拓「だって、別にそれだけで女の子達にキャー！黒乃君かっこいい！付き合ってとか言われる訳じゃないしーどうでもいいってゆうかーなんてゆうかー」

幸「ん？」

くい、くい

拓「どうした、幸音」

幸「あれ」

幸音が指差した方を見てみると・・・・

「キャー／／／／／／／／／黒乃君こっち向いてー！！！」

「黒乃様ー！私と付き合ってくださいー！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「黒乃君、結婚してー／／／／／／／／／／／！」

どうやら学園の女子の半分以上が黒乃にぞっこんらしい

拓「なっ・・・・・・・・・・・・・・」

幸「君だけかと思っていたけど、様まで付ける娘がいたなんて、私も想定外だわ、ねぇ拓人・・・・・・・拓人？」

幸音は、後ろに振り返ってみたが拓人は、既にいなかった

生徒会室

悠「なぁ黒乃、次のターゲットは雪鳴なのか？」

黒「いや、確かに彼女も欲しい人材だが、今は、まだいい」

悠「？じゃあ一体誰をねらうんだ？」

芹「はいっ姫羅々あ～んして」

姫「あ～ん」

悠「おいそこ、何普通にプリン食ってやがる」

姫羅々が食べているプリンを募集してしまった悠莉

姫「あっ！駄目全部食べ終わってないよ～」

悠「後でにしろ」

姫「ふんっだ、いいのかな～？生徒会のボスである私に対してそんな態度で」

悠「何がボスだ、ただのラクガキじゃねぇか！」

恐らく、急いで書いたのだろう、書記と書いてある所を塗り潰して上からボスと書いてある。

姫「何よ！マスターに負けた癖に」

悠「何だと！？このチビっ娘め～」

芹「落ち着いて下さい、姫羅々も悠莉様も」

姫・悠「ちっ」

黒「ところで芹空、例の調査の結果は？」

芹「貴方が望んだ結果でしたよ」

芹空は、紙切れを黒乃に渡し、もらった黒乃は歯を見せながら満足そうに笑った

黒「やはりな・・・・」

悠「何がだ？」

資料に書いてある事を覗き込もうと席を立った瞬間

拓「黒乃！」

なんと朝居なくなっていた、拓人がこれから戦にでも行く様な武士の姿をして現れた

黒「何の用だ？」

拓「俺は、七宮黒乃！貴様に一騎打ちを申し込む！」

黒「一応・・・・理由を聞こうか・・」

拓「ふんっ、あくまで白を切るか・・なら教えてやろう！なんだ今朝のあのハーレムっぷりは！？」

黒「あぁ、あれか」

拓「あぁ、じゃねぇ！そして、俺は、本日をもってお前の下僕を辞めてやる！」

黒「拓人・・・お前一つ間違ってる事があるぞ」

拓「え？」

黒「お前は、下僕なんかじゃないよ、お前は俺の・・・・」

拓「黒乃・・・・お前」

黒「お前は俺の犬だ、下僕なんてまだまだ先だぞ」

拓「は？」

黒乃の台詞に唖然としてしまった

黒「それに、犬なら姫羅々が居るしな」

そう言ってプリンを姫羅々の前でちらつかせた・・・・・すると

姫「プリン～！」

一目散にプリンの前までダッシュした姫羅々

黒「待て」

ピタッ

黒「食べてよし」

姫「わーい」

黒「とゆう訳でお前は、いらなくなった、今日から好きにしていいぞ」

拓「ふっ、ふふふふふふふふふ」

いきなり笑い出した拓人、マジで怖い

黒「拓人？」

拓「やっと、やっと解放された・・・・だが黒乃！俺は、まだ使命を果たしていない！」

黒「使命？一体何を言っているんだ？お前は」

拓「此処に来た時言ったはずだ、今朝のハーレムを俺は、許さないと」

姫「まだ、言いますかしつこいですね～」

拓「ふふふ、来てる、来てるぞ！全国のモテない男達の心の叫びが

！」

本当にモテない男達の叫びかは、わからないが確かに拓人の周りに黒い変な気が溢れている

拓「ははははははは！今の俺に不可能は、ないっ！行くぞ！黒乃！」

剣を抜いて襲い掛かって来た

黒「は――――全くどんだけ馬鹿なんだよ、らぁ！」

拓「へぶっ！」

姫「お～！今朝と同じ結果ですね！」

黒「悠莉、ちょっと頼みがある」

悠「え？」

悠「それは、構わないけどお前はどうするんだ？」

黒「俺はちょっと別件があってな、じゃあ頼んだぞ」

それだけ言うと、黒乃と姫羅々は何処かに行ってしまった

悠「さて、じゃあやりますか！」

拓「んっ・・ん？～ん、あれ？俺は一体何・・・を・・・・」

なんと拓人が目を覚ました場所はアイリスだった

悠「よぉ、起きたか？」

拓「！！！」

悠「おっと警戒すんなよ、俺はお前の味方だ」

拓「こ、此処は？」

悠「此処は、電子の世界、名をアイリスと呼ばれている」

拓「電子の世界だぁ？」

悠「まぁ、最初は信じられないだろうな、けど、よく周りを見てみな」

悠莉に言われた通り、周りを見てみると

拓「な、なんだ！？あれ！？」

拓人達の周りには、沢山のウイルスが居た

悠「あれはウイルス、俺達の役目は、ウイルスを駆除して、アイリスの平和を保つ事、そしてもう一つは、同じ戦士同士で戦い最強の戦士を決める事だ」

拓「最強の戦士って・・・・・・っておいっ！あれ、あれ！」

悠「あれは、ティラノウイルス！？どうしてこんな所に」

拓「ど、ど、どうすんだよ！？そこら辺にうじゃうじゃいんじゃねぇか！」

悠「ちっ、俺から離れるなよ、芹空！」

芹「了解です」

？「ふふふふふふ、今ごろあいつら大変な事になってるでしょうね」

黒「高見の見物は楽しいか？幸音」

幸「なっ！？黒乃なんでこっちにお前もあそこに居たはずじゃ」

黒「此処最近、数人の生徒が消えている」

幸「！！！」

黒「お前だったんだな？」

幸「ふふふ、流石黒乃ね、けどいいのかしら？向こういくら元生徒会会長だとしても拓人を庇いながら戦うのは、大変だと思うけど？」

黒「さぁ？そいつはどうかな？」

幸「くっ！奈勿（ななし）行くわよ！」

奈「ＯＫ！！」

恐らく、幸音のパートナーであろう奈勿が槍へと変わった

幸「行くわよ！」

黒「ふっ」

黒乃は小さく笑った

拓「うわぁぁぁぁぁぁぁ！なんなんだよ！？ちきしょおおおおおおおおお！」

ティラノ「グオオオオオオオオオオオオオオオン！！！」

一方、拓人と悠莉はティラノに追い掛けられていた

悠「くそっ！いくら俺でもこの量のティラノウイルスを相手にすんのはキツいぞ！くそっ黒乃の奴どこに行ってんだ！？」

ティラノ「グオォン！」

拓「のわぁぁぁぁぁぁ！」

悠「しまった！」

拓「く、食われる！」

しかし、いつまで経っても痛みを感じない、恐る恐る目を開けてみると

ティラノ「グ、グオォ」

？「あらあら、おいたがすぎますよ？」

純白の着物を着た水色の髪の女子が氷の壁を使ってティラノを押さえていた

悠「あの娘は？」

？「氷河の息吹きよ、駆け抜けろ、ブリザード！」

無数の氷がティラノの体に刺さっていった

拓「すげぇ」

拓人が謎の少女に見とれていたらその娘が拓人の目の前で歩いて来た

拓「え、えっと何か用かな君」

碧「碧医(あおい)」

拓「え？」

碧「私の名前です、よろしくマスター」

拓「いや、あのよろしくって言われても」

碧「申し訳ないですが、時間がないので契約に移させてもらいます」

拓「ちょ、契約って」

碧「はっ！」

ズボッ！　拓人の目に碧医の指が刺さった

拓「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！目が痛いいいいいいいいい！」

余りの衝撃の痛さに床に転がっている

碧「さぁマスター、これで契約は、終了しました、残りのティラノをかたずけましょう」

拓「痛い」

碧「あっすいませんマスターつい本気で」

拓「いいよもう、それよりさ、どうすればいいの？」

碧「何をです？」

拓「戦う時どうすればいいのかわかんないから」

碧「簡単ですよ、マスター私の名前を叫べばいいんですよ」

拓「よし、わかった！あっ！後さ、俺の事は拓人でいいから」

碧「！ふふ了解しました、拓人」

拓「おしっ行くぞ碧医！」

碧「はいっ！」

碧医は、グローブになった

拓「しゃあ！行くぜ！」

幸「ほらっさっきまでの威勢は何処いったの？」

黒「ハッ！」

幸「だから無駄なのよ、奈勿の力で私は、物の材質を操る事が出来

るのよ！」

幸音が地面に手を当てると地面が柔らかくなった

黒「姫羅々！」

しかし黒乃が姫羅々を地面に突き刺すと元の材質に戻った

幸「そんな！？・・・・・・・ハッ！」

黒「七宮流・剣技、瞬妖・横一文字！」

剣が何重にもブレてるようにみえ幸音には、凄く遅く感じてるのに避けられなかった

幸「かはっ・・・・」

幸音は、最後の力でなんとか黒乃に触ろうと必死になったが、その手は、届かなかった

黒「これで終わりか、後は向こうか・・・・」

拓「おらっ！凍てつけぇぇぇぇぇ！」

ティラノ「グオォォォォォォォォォン！」

拓「碧医！残り何体だ？」

碧「前方に見える３体だけよ！」

拓「だったら！絶氷天下！！！！！！」

手のひらを天にかざすと、ティラノの３体の上空に氷の板が現れた

拓「潰れろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

ティラノ「グオォォォォォォォォォォォォン！！！！」

拓「はぁ、はぁ、はぁやったのか？」

碧「はい、敵全てＬＯＳＴ拓人、貴方の勝ちよ」

拓「えへへ、うっし疲れたし帰るか」

碧「はーい」

黒「なんだ、割と早かったな、もう少しかかると思ってたんだが」

悠「つうかお前何処行ってたんだよ？」

黒「お前等を襲わせた奴と話してたのさ」

幸「何が話してたよ！あんなのただの拷問じゃないの！」

拓「なっ幸音！？俺達を襲ったのは、幸音だったのか！？」

黒「あぁ、では幸音大人しく負けを認めて俺の部下になれ」

幸「くっ」

悠「諦めろ、お前ももう神には、なれない」

幸「――――――わかった、協力するわ」

黒「お前はどうする？拓人俺の敵になんなら容赦しないぜ？」

拓「ふっまさか、いいぜ乗り掛かった船だ、最後まで乗ってやんよ」

黒「さて、後この学園に残ってる戦士は、1人だけだな、待ってろ絶対に服従させてやるぜ」

第四話：目覚める氷帝（後書き）

カイザー「すいません、いろいろあって更新遅れてしまいました」

拓「まぁまぁいいじゃないの、1週間以内に書けたんたがらさ」

カイザー「ありがとう拓人君」

碧「やっと私が登場しましたね、これからの私の活躍に期待して下さいね」

第五話：正義ＶＳ絶対正義（前書き）

やっと書けた。

第五話：正義ＶＳ絶対正義

拓「なぁ拓人？これから何処に行くんだ？」

黒「ん？生徒会室だが、何か問題があるのか？」

拓「いや、行って何をするのかな？と思ったんだが」

幸「どうせ、私達の生徒会の役割決めでしょう」

黒「まぁ、それもあるし、何よりこれからの事も考えなきゃ行けないしな」

幸「ふーん」

そして生徒会室のドアを開けた、するとそこに居たのは姫羅々だった

姫「ふふふ、よく来たわね愚かな愚民共め！」

何の真似かは知らないけど足をくんで、偉そうに座ってる

黒「姫羅々、俺を愚民扱いするとはいい度胸だな？」
黒い笑顔を見せた瞬間、姫羅々の表情が青ざめていった
姫「ま、間違いました！マスター以外です！」
怯えながら喋ってる、相当怖かったらしい
幸「じゃあ私此処の席にさせてもらうわ」
拓「じゃあ俺此処な」
しかし、皆無視して座っていく
姫「あれっ？み、皆して私を無視ですか？」
黒「では、まずそれぞれの役割を決める、二人共自分からしたい役あるか？」
拓「俺、簡単なのがいい」
幸「私は、書記をやりたいわ」
黒「成る程、なら幸音には書記を拓人はこれをやってもらう」

そう言って二人が渡されたのは、書記と書いてあるやつと、犬と書いてあるやつだった

拓「あはははは、やったぁ犬だぁあはははは・・・・ってなんでやねん！」

悠「おぉ、ノリツッコミ」

拓「なんで、犬！？確かに簡単なのがいいって言ったけど、流石に犬はないだろ！？つうか犬って何！？何やんだよ！？」

黒「だってお前、前の戦いで下僕は嫌だって喋ってたじゃん」

拓「・・・・・あ」

幸「で、役割も決まった訳だしこれからどうすんの？」

黒「そうだな、本当なら別の学園の野郎と闘う予定なんだが、後1人足りない」

拓「後1人？誰だよ？」

幸「・・・！まさか、北大路雪鳴」

黒「あぁその通りだ」

拓「おいおいマジかよ、北大路雪鳴っていったら風紀委員会で有名な鬼人雪鳴だろう？あんなの仲間にできんのかよ？」

黒「簡単だ、あの手の奴は一騎打ちで戦って勝てば仲間になるって、この間拓人の家で見たマンガに書いてあった」

碧「そうなのですか？」

拓「た、多分違うと思う」

黒「それにもう果たし状送っちゃったし」

悠「早っ！」

黒「じゃあな、留守番たのんだぞ」

そう言って、黒乃はアイリスに行ってしまった

悠「本当に行きやがった」

～アイリス～

雪「来たわ・・・」

黒「遅れてすまなかったな、少し用があってな」

雪「そんな事はどうでもいいから、用件を話して下さい！」

黒「簡単だ、お前が勝てばお前はまた一つ、強くなれるその代わり俺が勝ったら俺の部下になってもらう」

雪「――――――っわかりました、この勝負・・・・・受けます！」

互いに自慢の愛刀を抜いた

雪「北大路雪鳴・・・」

黒「七宮黒乃・・・・・」

雪・黒「参るっ！」

雪「北大路流・奥義五の太刀・水鳥（みずち）！」

雪鳴の愛刀冠夷から放たれた、激しい水が燕の様な形に変わって黒乃に向かって行った

黒「七宮流横一文字斬り！」

しかし、黒乃の攻撃によって燕は消された様に見えたが・・・・・・

黒「これは！？蒸発して霧になっている！？くっ！」

霧のせいで、視界を奪われてしまった。

雪「やあぁぁぁーーーーーーー！」

黒「っ！上か！？」

咄嗟に構えたから良かったものの後数秒遅れていたら頭に当たっていただろう

雪「鬼縛の札！」

だが、雪鳴の攻撃はまだ終わっていなかった。懐からだした、札が縄となって黒乃の左腕を縛りつけた。

黒「ふっ、この程度の縄なんて直ぐに・・ハッ！」

黒乃が気付いた時には、すぐ目の前に雪鳴が居た。

黒（不味い！この距離じゃかわせない！）

雪「もらった！」

黒「――――？斬られてない？」

驚くべき事に黒乃の体は、斬られてなかったのだ。

黒「・・・何をした？」

雪「直ぐにわかるわ。」

黒「・・・！！足が・・・動けない？」

黒乃が何故か動けなくなっている。

雪「動けないでしょ？それは、冠夷の能力なの。」

黒「能力？」

雪「そう、冠夷の能力は斬った所を縛る力、だから貴方の足は動かないのよ。」

黒「成る程、確かに厄介な能力だな・・・だがそれ故に、姫羅々との相性が悪いな」

すると、黒乃はいきなり自分の足を斬った

雪「え？・・・」

黒「何を驚いてる？冠夷に能力がある様に姫羅々にだって能力があるんだよ。」

雪「そんな！？くそっ、ならもう一度！」

今度は、左腕を斬ったが

黒「無駄な事を」

やはり、姫羅々の能力によってまた元に戻る。

雪「なんで、なんでなのよ！」

黒「まだわからないか、姫羅々の能力は相手の能力をなかった事にするんだよ」

雪「そ、そんな」

黒「大人しく、俺の物になれ」

雪「認めない・・・認めないわ！貴方の様な悪の塊は、正義である私が倒す！」

黒「ふっ、笑わせるお前が正義なら俺は・・・・・絶対正義だ！」

再び、二人は激突しあうしかし勝負は目に見えていた

雪「北大路流・奥義　疾風雷鳴閃（しっぷうらいめいせん）！」

鞘から抜かれた、剣が雷をまとい振り払った瞬間黒乃めがけて放たれた。

黒「チェックメイトだ、七宮流・奥義　斬魔一閃（ざんまいっせん）！」

対する黒乃も鞘から剣を抜き一気に力を放った。その一撃は雪鳴の

攻撃を上回った

雪「そんなっ！？」

黒「終わりだ！」

雪「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

雪「そんな、私が負けるなんて・・・・」

黒「では、約束通り仲間になってもらおうか？」

雪「うぅ・・わかりました。やります、やればいいんでしょ！？」

黒「いい返事だ」

黒「これで、メンバーが揃った。ではどの学園から落とす・・・！！」

雪「どうしたの？急に後ろ向いて」

黒「いや、なんでもない（今、誰かに見られてる気がしたんだが気のせいか？）」

第五話：正義ＶＳ絶対正義（後書き）

カイザー「やっと書けたよ～書く時間がなくて大変だった！」

姫「カイザーも大変なんですね～」

カイザー「うん、駄文だから書くの大変なの。」

拓「それよりさ、俺もなのはとかとコラボしてみたいよ！」

カイザー「あ～、アクセスが終わったら考えとく」

黒「ふっ、どんな作品が来ようとも俺には、勝てないさ」

カイザー「では、さようなら」

第六話：闇の王　　烏間、現る！（前書き）

烏「ついに俺の登場だな」

拓「まぁ、敵だから何時かはやられるんだけどね。」

烏「貴様ぁぁぁぁぁ！」

拓「ぎやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

第六話：闇の王　　烏間、現る！

黒「拓人、暇だ四階から飛び降りて来い。」

拓「いや、無理だから。」

幸「拓人、この書類誤字が沢山あるわよ？」

拓「あっ！悪い悪いすぐ書き直すよ。」

悠「拓人、来月の行事予定表作ったのか？」

拓「やっべ！そういや、まだだった！」

雪「拓人君、来月の入学式の予定時間大丈夫ですか？」

拓「はい、大丈夫です。」

冠「すまぬが小僧、茶を頂けぬか？」

拓「自分でやれ、このイケメン侍が」

奈「タッキー、トイレって和式派？洋式派？」

拓「洋式派だ！」

芹「拓人さん、このお花可愛いですよね」

拓「そうだね、けど芹空今は仕事してほしいな。」

碧「拓人様、この漫画続きないのですか？」

拓「っつ、てめぇら・・・・・いい加減に・・・・」

姫「プッ、プッ、プリン～～～～～」

拓「いい加減にしやがれぇ！！！！！！！」

ちっ、またあの馬鹿は騒ぎ出しやがって。死にたいのか？

黒「何を騒いでいるんだ？拓人、今は仕事中だぞ？静かに出来んのか？」

拓「俺だって静かに仕事やりたいよ！けど俺以外誰も仕事してないじゃねぇか！」

確かに、拓人の言うとおり皆あまり仕事をしてないな。姫羅々に関してはプリン食ってるし。

拓「それに、他の学園の所に居たのかよ？戦士が。」

黒「当たり前だ、この間の全学園の生徒会会長が集まって話す通称：全先会議で他の学園の奴等のプロフィールを見たからな。」

拓「おぉ！流石黒乃、で？最初は、どの学園と闘うんだ？」

黒「私立第四天冥学園に居る、不良共のボスの烏間亨（からすま・とおる）だ」

拓「げっ！烏間って言ったらあの極悪非道で有名な闇の王じゃねぇか！？あんなのと闘うのか？」

黒「そうだ、そして闘う為には、烏間と接触しなければならない。だから何人か俺と一緒に今から烏間に会いに行く奴いるか？」

拓「悪いな、俺は皆の分の仕事があるからさ皆で行って来てくれ。」

雪「さて、来月の予定表作らなきゃ。」

幸「あら？このプリント誤字があるわ、修正しなくちゃ。」

悠「よしっ、入学式は無事行えそうだな。」

芹「冠夷、お茶が入りましたよ。」

冠「うむ、かたじけない。」

奈「全国トイレアンケート用紙を作らなくては。」

碧「あら、ラスボスの割りには弱いですね？」

姫「プッ、プッ、プリン、プッ、プッ、プッ、プリン～」

黒「皆忙しそうだが？」

拓「お前等、汚っねぇぞ！」

しかし、皆は拓人の事を無視してる。まぁそりゃあ誰だってあんな不良共の巣行きたくねぇよな。

黒「さてと、行こうか。」

拓「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

第四学園

男「烏間さん、大変です！」

烏「どうした？」

男「第五学園の奴が、烏間さんに会いたいって言ってますが？どうします？」

烏「人数は？」

男「それが、二人だけなんです。」

烏「・・・・・ふっ、いいぞ、通してやれ。」

男「はいっ！おいっ入って来い！」

拓「おっ、お邪魔します」

拓人Ｓｉｄｅ

第四学園に来たのは、いいけどやっぱ雰囲気からして怖いな

男「はいっ！入って来い」

おっ、呼ばれた、よしっ頑張れ拓人、スマイルだスマイルそうすれば、向こうだって笑顔で迎え入れてくれるさ。

拓「おっ、お邪魔します」

そして、顔を上げた俺を迎え入れてくれたのは

男共「あぁん？」

怖いお兄さん達でした

拓人Ｓｉｄｅ終了

拓（黒乃～助けてくれ、この人達怖いよガンだけで俺殺される気がしてきた。）

黒「第五学園の生徒会会長七宮黒乃だ、烏間亨に用があって来ました。」

烏「俺が烏間だが？何の様だ？」

黒「二人きりで話せる場所を所望する。」

男「何ぃ？んな事出「いいだろう、ついて来い」烏間さん！？」

烏「構わねぇよ、話位ならしてやるよ。」

黒「じゃあ、拓人留守番宜しく。」

拓「い、いやです。こんな所で死にたくないぜ、俺も一緒に行くでごわす！」

黒「語尾を統一しろ、まぁした所で連れて行かないけどな。」

拓「畜生！」

烏「此処なら二人きりで話せるぜ？」

黒「そうみたいだな、ではあまり時間をかけたくないから単刀直入に聞く。お前も選ばれた戦士なのか？」

そう言って自分のブレスレットを見せた

烏「！成る程な、それで俺に会いに来た訳か・・・」

黒「答えろ」

烏「答えは、ＹＥＳだ」

黒「なら、今すぐにでも」

烏「それはＮＯだ」

黒「何故だ？」

烏「まだ全員じゃないんでね、メンバーが」

黒「全校名簿にはそれらしき奴がいなかったが？」

烏「あれは真面目な生徒と俺しか載ってないんだよ。だから、そいつ等今ちょっと用事で出かけてるからさ、帰って来てからでもいいか？」

黒「わかった、ではルールを決めておこう。」

烏「こっちは五人だかそっちは？」

黒「奇遇だなこっちも五人だ勝負は、一人一人が闘い勝った数の合計が多い方が勝ちでいいか？」

烏「決まりだな、後日連絡を送ろう。」

黒「拓人何をしている？」

拓「黒乃、見てくれ俺は勝ったんだ勝てたんだよ！」

黒「いや、カードゲームで勝ってるだけじゃないか」

拓「はははははははははは、今の俺に不可能などないっ！」

黒「馬鹿やってないで帰るぞ。」

烏「七宮！現実でも相手になってやるぜ？」

黒「ふっ・・・・気が向いたらな。」

黒「ふっ、ふふはははははは」

拓「どったの？」

黒「烏間は俺が最強だと思っているからなそんな奴を蹴落とすのって気持ち良いだろうと思ってな」

拓（それって、黒乃と同じ性格って事じゃん）

※黒乃は自分も烏間と同じ性格だなんて気付いてません

第六話：闇の王　　烏間、現る！（後書き）

カイザー「あ～、だるい」

姫「どうしたんですか？」

カイザー「いや、アクセス書いた後何を書こうかと思っていて。」

姫「他の人達みたいにリリカルなのはとのコラボとかクロスオーバーを書いたらどうですか？」

カイザー「やっぱそうなるか、よしならアクセスが終わったらリリカルなのはとのコラボを書こう！」

姫「その前に無事アクセスが終わるかどうかですよ？」

カイザー「はい。」

第七話：決戦！ＤｅａｄＧａｍｅ前編（前書き）

烏「それでは、この俺様の偉大な活躍をご覧ください。データコード認証、アクセス！」

第七話：決戦！ＤｅａｄＧａｍｅ前編

前の一件から直ぐに烏間から連絡があり、決戦も明日に決まった。

拓「いや展開早くね？」

幸「仕方ないでしょ？カイザーが早く終わらせて次の作品書きたがってるんだから。」

烏「よく来たな第五学園の戦士達よ、決戦の地は既にアイリスの方に出来てあるが、逃げるなら今の内だぞ？」

雪「私は逃げません！貴方の様な悪は私が倒してみせます！」

烏「ふっ、威勢のいい女だな、では先に行ってるぞ。」

そう言って烏間はパソコンからアイリスに入って行った。

～アイリス～

拓「よいしょ、ってなんじゃこりゃぁ！？」

黒乃達が見た物は巨大な平らなステージだった

烏「来たか・・・・全員いるって事は、全員やるって事でいいんだ

な？」

黒「あぁ、準備は出来ている。」

烏「宜しい、では今ここにＤｅａｄＧａｍｅの開幕を告げる！最初に闘うのは誰だ？」

雪「私が行きます！」

烏「ならこちらからは、鷹原（たかばら）行けるな？」

鷹「いつでも」

烏「よし、決まりだな。」

最初の試合は雪鳴と鷹原になった。

雪「北大路家六代目当主、北大路雪鳴参ります。」

鷹「鷹原隼人（たかばら・はやと）だ。女だからって手は抜かねぇぞ。」

雪「冠夷！」

冠「御意」

先に動いたのは雪鳴だった

雪「はぁっ！」

鷹「千華（ちか）頼むぞ。」

千「はい、隼人」

鷹原の手に槍が現れ、雪鳴の攻撃を受け止めた

雪「水鳥！」

雪鳴は前の闘いでも使っていた水鳥を放った

鷹「亜路沙射（あじさい）！」

対する鷹原は槍を持ったまま、突っ込んで来た。

鷹「うおぉぉぉぉぉりゃあぁぁぁぁぁぁ！」

鷹原に向けて放たれていた水鳥も貫かれてしまった。

雪「早い！ならもう一度みず・・「遅い！」はっ！」

すんでの所で鷹原の攻撃はかわせた様だしかし

雪（さっきのは、一体？スピードが急に上がった？）

鷹「あれは、千華の能力なんだよ。」

雪「！？なんですって。」

鷹「千華の能力は、一時的に身体力を上げるんだ、こんな風にな、忠律府（チューリップ）」

今度は、物凄い勢いで飛び跳ねた。

雪「成る程確かに厄介ですね。ですが、空中に飛んだのが間違えでしたね！鬼縛の札！」

鷹「お札だと！？まさか最初からこれを狙ってたのか！？俺が空中に飛ぶと予測していて」

雪「冠夷！２ｎｄモード！」

冠「御意。」

冠夷が日本刀から釘バットへと姿を変え、それを見た鷹原は顔を青くしていった。

鷹「ま、まさかお前それで殴る気か？」

雪「いいえ、殴るんじゃなくて、ぶっ飛ばします！」

鷹「くそっ縄が解けないし空中にいるせいで上手く動けない。」

雪「北大路流奥義：城凱崩霧乱（場外ホームラン）！」

鷹「う、うわぁぁぁぁぁぁぁ！」

鷹原は何処かに飛ばされてしまったようだ。

拓「大丈夫なのか？あれ」

黒「大丈夫だろ、死んではいないのだから」

烏「では、次の試合といこうか？」

悠「なら、次は俺だな」

烏「ならば、こちらは絹鷲(きぬわし)お前だ」

絹「はっはい！」

悠「相沢悠莉だ、よろしくな。」

絹「えっ、えっと絹鷲太一(きぬわし・たいち)ですどうぞよろしく。」

悠「芹空、速攻でけりをつけるぞ。」

絹「李離香(りりか)くるよ準備して」

悠莉は空高く舞い上がり、剣を上に向けた。

悠「全てを照らす浄化の光よ、その輝き永遠に放ち続けろ！サテライト・シャイン！」

悠莉の剣先に沢山の真っ白な光が集まり一気に太一に向かって放たれた

絹「リフレクト・ミラー！」

けど、サテライト・シャインはいとも簡単に跳ね返された。

悠「なっ！」

自分の放った光を浴びてしまった悠莉はボロボロだった。

幸「三番目は、私よ。」

草「では、ここは私くしがまいりましょう。草壁梟（くさかべ・ふくろう）と申します。よろしくお願いします、お嬢さん。」

幸「あら、礼儀だけはわきまえてるようね？」

草「恐縮です、では参ります。忌羽（きじゅ）！」

草壁はトンファーを手に取った瞬間物凄い勢いで向かって来た。

幸「蒼き魔弾（ネーブル）」

槍から出た蒼い弾が草壁に向かって放たれたが、草壁は目にも見えない早さで弾き飛ばしていた。

草「その程度の初級魔法では、私は倒せませんよ？」

幸「えぇ知ってるわ、けど、これでいいの」

そこで草壁は気が付いた、自分の周りが水浸しな事を

幸「くらいなさい、プラズマ・シュート！」

草「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

トンファーも水浸しになってるせいで電気が通ってしまった。

幸「ふふふふ・・！？」

草「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ今のは中々効きましたよ。」

幸「嘘、普通の人間ならショック死してもおかしくないのに。」

草「生憎、頑丈が取り柄なんです。」

幸「ちっ、なら今度はこれよ！紅い流星（クリムゾン・メテオ）！」

今度は上から大量の紅い流星が降ってきた。

草「ほう、これは凄いですね。ならこちらも、そろそろ見せましょうか。」

トンファーを構え、少し怖い顔をし始めた草壁

幸「一体何を？」

草「大地の声よ、鳴り響け！ストーンウォール！」

草壁が地面に拳を叩きつけると地面から巨大な岩の壁が現れ、流星を防いだ。

幸「そんな・・・・」

草「おっとよそ見してる暇なんかあるんですか？」

幸「しまっ」

草「月刀連牙（げっとうれんが）！」

トンファーを回転させながら、幸音の懐に拳を二回当てた。

幸「かはっ、ゴホッゲホッオッオェッ！」

幸音は余りの痛さに吐いてしまった。

草「どうですか？リタイアする事ならできますよ？」

幸「なんですって？」

草「ですから、これ以上惨めな思いをしたくなかったらリタイアしても構いませんよ？」

幸「誰がリタイアなんてするもんですか。」

草「ほう？では勝負を続けると？」

幸「当たり前でしょ、私を誰だと思ってるの？藤堂グループの次期当主、藤堂幸音よ！」

草「素晴らしい精神力です。しかし、私の能力は自然の力を借りる事です。ですから、貴方の魔法のほとんどが意味をなさないのですよ。」

幸「奈勿」

奈「あ？」

幸「あれ、いける？」

奈「・・・・どうせ無理って言ったってやるつもりなんだろ？」

幸「ふふっ、わかってるじゃない流石は私のパートナーね。」

草「お話は終わりましたか？」

幸「えぇ、いくわよ。」

草「どうぞ。」

幸「空間（そら）より出でし、太古の力、我が力となりて刻みこめ！ザンジック・エニックス！」

空間から十数本の巨大な剣が現れた

草「これは、まさか禁忌魔法の一つの！？何故貴方がこの魔法を！

？」

幸「さぁ？何ででしょう？ほら、自然の力で消してみなさいよ、消してしまったら一生出れない異空間にいっちゃうけどね。」

草「くそっ、くそっ、くそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

第七話：決戦！ＤｅａｄＧａｍｅ前編（後書き）

カイザー「いや～話長くなりそうだから、前編と後編に分けちゃった。」

烏「・・・・・・・」

カイザー「どうしたの？烏間」

烏「俺様が活躍してない。」

カイザー「あ～、ごめんね後編ではちゃんと活躍するからさ。」

烏「約束だぞ。」

カイザー「はいはい、それじゃまたね～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4963l/

アクセス！

2011年10月7日05時31分発行